『週刊日本の歴史』

中島 信

私は日本の歴史についての研究者です。この記事では、日本の歴史の中での重要な出来事を紹介します。
突然の変化に対応するために、彼女はすぐに行動を起こすことに決めた。彼女はすぐに行動を起こすことに決めた。彼女はすぐに行動を起こすことに決めた。彼女はすぐに行動を起こすことに決めた。彼女はすぐに行動を起こすことに決めた。彼女はすぐに行動を起こすことに決めた。彼女はすぐに行動を起こすことに決めた。彼女はすぐに行動を起こすことに決めた。彼女はすぐに行動を起こすことに決めた。彼女はすぐに行動を起こすことに決めた。彼女はすぐに行動を起こすことに決めた。彼女はすぐに行動を起こすことに決めた。彼女はすぐに行動を起こすことに決めた。彼女はすぐに行動を起こすことに決めた。彼女はすぐに行動を起こすことに決めた。彼女はすぐに行動を起こすことに決めた。彼女はすぐに行動を起こすことに決めた。彼女はすぐに行動を起こすことに決めた。彼女はすぐに行動を起こすことに決めた。彼女はすぐに行動を起こすことに決めた。彼女はすぐに行動を起こすことに決めた。彼女はすぐに行動を起こすことに決めた。彼女はすぐに行動を起こすことに決めた。彼女はすぐに行動を起こすことに決めた。彼女はすぐに行動を起こすことに決めた。彼女はすぐに行動を起こすことに決めた。彼女はすぐに行動を起こすことに決めた。彼女はすぐに行動を起こすことに決めた。彼女はすぐに行動を起こすことに決めた。彼女はすぐに行動を起こすことに決めた。彼女はすぐに行動を起こすことに決めた。彼女はすぐに行動を起こすことに決めた。彼女はすぐに行動を起こすことに決めた。彼女はすぐに行動を起こすことに決めた。彼女はすぐに行動を起こすことに決めた。彼女はすぐに行動を起こすことに決めた。彼女はすぐに行動を起こすことに決めた。彼女はすぐに行動を起こすことに決めた。
四人の著者たちとも大きく違うわけではないのではないかと思う。ただ私の記録形式に一貫性がないのは、書き続ける姿勢に自然さが欠けているのか、と反省させられた。

入江の場合、育児日記をつけ始めたのは、「自然なゆき」という。肉体的な疲労から、「何日も記録をとれないこともあった」が「それでも少しずつ続けたのは、いつか子どもたちの手が離れれたときにじっくりと楽しむから考えてみたい」という思いがあったから。（三頁）だとしていて、「毎日新-variatyこをする大阪がおもしろくて」（復田、一六九頁）、「おもしろいことになる」（四九頁）など、各自記録を続ける姿勢に無理がなないこと。「家庭」という一四時間保育をつづけるところで、母子が密着してしまいそうなど、育児記録を書くことになり子どもを他者として距離をもって見ることができた。（復田が回想するように、「書くこと」は子どもと自分との精神的な距離を調整しやすい保育をめざす意志のもとに、それが再び子どもとも出会いのに必要な過程として「自然に実践」というのはどうもこういう次元のことではないと思う。
ちを十分投じていていなかったと後悔したり。なぜものの
前向きに、わが子のうち歴史を再認識し、それ
によって今現在の子どもが一つのかけがえのない
存在として改めて目立ってくるというような変化も
生じたのではないか。ただそのような経験を今
更しないよう自分自身への驚嘆もあるかもしれない
者たちはどのような研究をするのだろうか。

著者たちが皆きょうだい関係を取り上げながら
摘するように
に、下の子を
迎えた時期の年齢差（二年ほどではあるが）のも
つ意味は大きいようだ。逆にこの時期の発達の機
微がうかがえて面白いか。巻末の「まとめてかえ
て」で論じられているが、幼児の行為の中に「建
設的」な「意志」を見ることがによって、「赤ちゃ
ん返り」というような外見的で雄極的な表現は自
然解消してきている。

上の子どもが自らをとりまどすように見えるの
において、下の子もは、人生の始めから世界の
一部であった上の子どもを、自分の想像を映す鏡
にしなが、自己という実像をさかし求めの旅に
放たれているのだろう。さと橋爪、桜田のパートを読
保育の本から

んで印象づけられた。すると、あの執拗に繰り返されるわが家のきょうだいげんかは、上の子は上で、下の子は下で、自己を育てるのに一生懸命な姿なので、その得をする。わかってはいたはずなのに、この本が、上の子どもに焦点をあてたものです。研究と下の子どものことで半々の構成になっているのも、全体できょうだい相互の関係にある姿を印象づけるのに効果的で、成功していると思った。

育児日記と保育学

それぞれの著者に、「なぜだろう？」、「なぜ上」「下」の子を？」と、もう一步立ち入って尋ねてみた。「わが子」の登場する、たとえばピアジェの知能の研究や、またはここに言語発生に関する研究では、研究テーマと研究者との関わる上で、有機的に変わることはない。それが対して中から創造した人にによる。それ自体で充足したその中からバーゲン保育を、中から新しい「保育学」を可能にするのかなとさえ考えた。

（十文字学園女子短期大学）